

善隣

No.533 通巻800

2023年（令和5年）3月1日発行（毎月1日発行）

2023

3



一般社団法人 国際善隣協会



5階会議室に設置した「垂直式避難器具」の説明を聞く参加者



自衛消防訓練（2022年11月17日）

善 隣

目 次

2023年 3 月号

公開講演会記録

満鉄調査部の農村調査 中生勝美 2

中国語を生涯の友として 神崎多實子 8

報告

神田小川町「漢陽楼」食事会 村田嘉明 19

会員彼是

アントニオ猪木氏を偲ぶ 伊大知重男 20

陶々俳壇

..... 馬場由紀子 22

中国ウォッチング

..... 編・訳 上松玲子 24

協会通信・同好会だより 26

2023年 3 月の行事予定 27

—— 善 隣 第533号 通巻800号 ——

2023（令和5）年 3 月 1 日発行

発行所 〒105-0004 東京都港区新橋 1-5-5
一般社団法人 国際善隣協会

TEL 03（3573）3051
FAX 03（3573）1783

発行人 矢野一彌

編 集 原田克子

編集協力 朝 浩之、山谷悦子

印刷所 (有)ゆにおんプレス
TEL 048-834-1201

定価 一部400円 年額4,800円

振替 00120-0-145956

国際標準逐次刊行物 ISSN 0386-0345

©禁無断転載

みんなの写真館

（姜晋如、新宅久夫）

—— 。 —— 。 —— 。 ——

当協会は、中国ならびに近隣諸国
との相互理解を深め、友好親善・交
流を推進しています。

一般社団法人 国際善隣協会

公開講演会記録

満鉄調査部の農村調査

桜美林大学教授 中生勝美

わたくしの専門は社会人類学で、国社会と文化の変遷を研究しており、近現代史にも足を踏み入れている。著作に『中国村落の権力構造と社会変化』（東京・アジア政経学会 1990年）および『近代日本の人類学史——帝国と植民地の記憶』（東京・風響社、2016年）があり、中国農村の社会、宗教、歴史およびに日本の人類学史を研究している。

今回の講演では、満鉄調査部が河北省と山東省でおこなった「北支農村慣行調査」についてお話しする。これは別名「華北農村慣行調査」として知られ、1938年に満鉄創業30周年記念

事業の1つとして提案された企画だった。当時、台湾総督府が後藤新平の主導で、京都帝国大学法学部の岡松参太郎教授を中心に実施した「台湾旧慣調査」や、白鳥庫吉が主幹した『満洲歴史地理』に匹敵する、満鉄調査組織にふさわしい企画として期待された。この企画は、東京帝国大学法学部の末弘厳太郎（1888〜1951）が打ち出した「生ける法」の探求という、従来とは異なる調査方針が提唱され、それまで満鉄調査部で実施していた満洲旧慣調査の方法とは異なるため、内部では、かなり反発が大きな調査だった。この「生ける法」の探究とは、従

来の項目ごとの記述ではなく、調査過程そのものを問いと答えの問答形式をそのまま報告書にするもので、法学部としては、司法手続きが審問と答弁を記録する方式で、聴取のプロセスが直接復元できる手法として評価できるが、それまでの方法とは全く異なっていたので、反発が大きかったようだ。

この調査は、戦後まとめられて岩波書店から『中国農村慣行調査』全6巻として出版された。戦後の肯定的な評価で、仁井田陞は次の3点を指摘している。

(1)『慣行調査』は植民地調査の系譜に属するが、純粹学問的調査であった。

(2)調査目的が「生ける法」の探求であり、社会内部の現実構成をとらえようとした。

(3)調査地が日本占領地区であったために、中国農村の内的変革への展望がなかった。

また、末弘の方法論が、生ける法の探究という法社会学の観点で調査をしたということ、法社会学からは、次のような評価がされている。

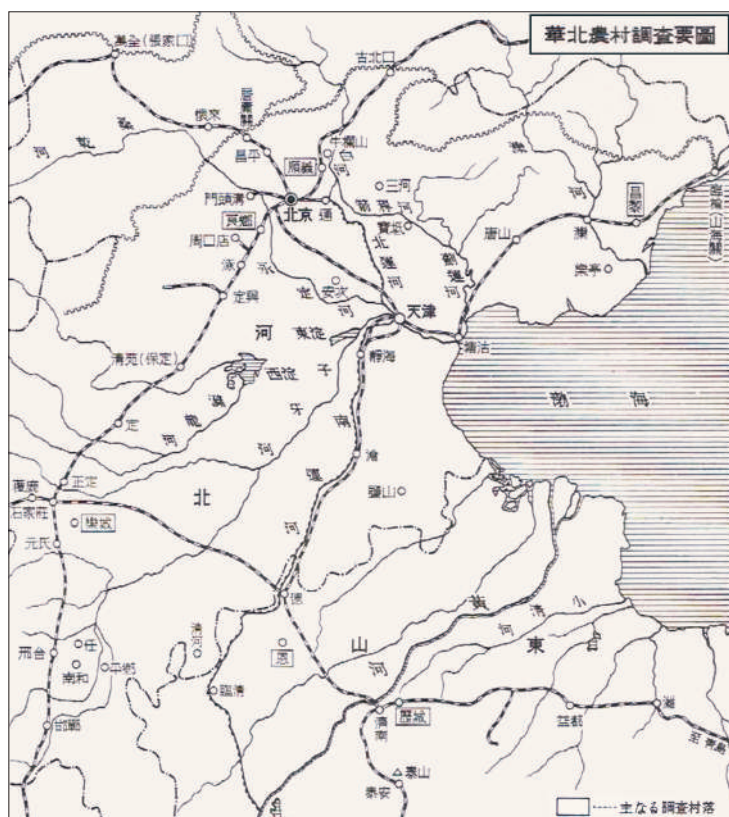
(1)占領政策への消極的抵抗の立場をくずさず、学問的調査に徹しようとした。

(2)それを可能にしたのは、末弘の政策目的から離れて純粹に科学的な調査に徹しようとする学問的姿勢とユニークな法社会学理論にある。

しかし、否定的な意見も少なかった。第1に戦時中の調査であったということ。第2は通訳を使った調査であったということ。第3は調査対象者が有力者に限られていたということ。そしてその結果中国社会の内部的変革の展望がかくされていた。つまり革命に至るまでの中国内部の変革とな

る要因までは追求されていないということ。第4に、調査を組織した中心人物が末弘厳太郎を中心とする法学部の人たちで、報告書が、一般的な報告書ではなく、問答形式をそのまま掲載する形式であること。そのためもともと満鉄調査部の旧慣調査部にいた調査員たちからの評判が悪かったということもあった。

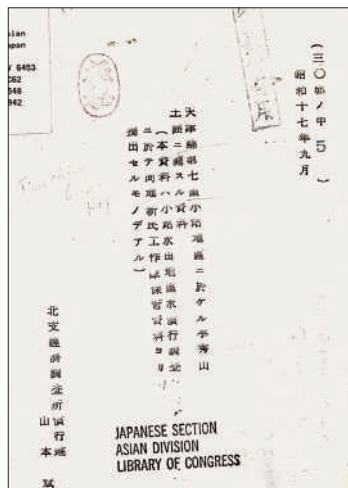
しかし、戦時中の調査が、それほど純粹学問的にできたのか、かなり疑問がある。近年、新しい視点で、末弘が主張する純粹学問的調査という主張への批判が、石田眞によって展開されている。この論文は、従来とは別の角度から分析して、東亜研究所の「支那慣行調査」が、日中戦争開始後の「国策」遂行のために企画された占領地支配政策そのもので、末弘厳太郎は当初からその政策に深く関与したことを明らかにしている(石田眞「植民地支配と日本の法社会学 華北農村慣行調査における末弘厳太郎の場合」『比較法学』36(1)、1~16、2002)。上掲の地図は、調査地を示している。



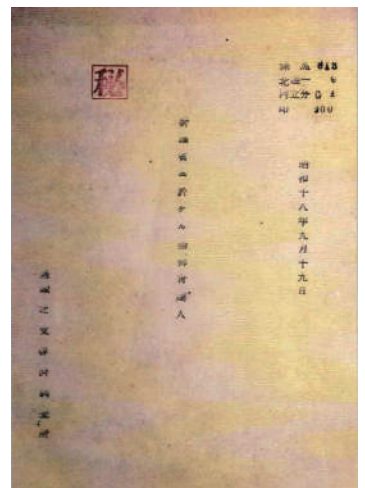
配政策そのもので、末弘厳太郎は当初からその政策に深く関与したことを明らかにしている(石田眞「植民地支配と日本の法社会学 華北農村慣行調査における末弘厳太郎の場合」『比較法学』36(1)、1~16、2002)。上掲の地図は、調査地を示している。

『中国農村慣行調査』の調査内容の信憑性について、これまで文献資料を中心に検討が進められてきたが、筆者は、同じ調査地で関係者から直接話を聞くことで、その内容の検証を進めてきた。フィールドワークによる『中国農村慣行調査』の検証は、山東省済南市郊外から始めた。1983年10月から北京で語学研修をはじめ、休暇を利用して、天津の南開大学、山東省の山東大学へ調査地の選定のため、短期間の旅行をしました。そこで、山東大学は、満鉄調査部が調査した歴城県に近く、冷水溝まで自転車で1時間であることを確認したうえで、1984年9月から86年3月まで山東大学に留学した。調査に入って、まず確認したのは、満鉄調査部が調査をした1943年から44年にかけての、北支駐屯軍と村人の関係だった。そして判明したのは日本兵が冷水溝にやってきて、地主を殺害したことだった。当時、日本兵は突然村に押し入ってきたので、多くの農民は畑に逃げた。運悪く捕まった農民は、命乞いをしたが、頭の後ろか

ら銃で打ち抜かれて即死し、多くの農民は畑の中から身震いしてその様子を見ていた。だから、農民は日本兵への恐怖心が植えつけられ、満鉄の調査員が来たときは、日本人への恐れの方が大きかったのだ。それは応答の不正確さにも出ており、特に地主が殺傷されたので、地主に関する聞き取りは、ほとんどが警戒心をあらわにしてまとも



アメリカ議会図書館収蔵資料



天津社会科学院収蔵資料

に答えていない。

私の調査は、こうした現地での聞き取りと同時に、1980年代は満鉄調査に参加した関係者が多く存命で、彼らからも聞き取りをしている。私が調査を終えて日本に帰国したとき、満鉄の調査員として冷水溝を調査した内田智雄氏が健在だったので、電話をした。彼は冷水溝で村人と良好な関係を築いたから調査がうまくいったと言っていたが、日本兵が満鉄調査前に冷水溝を襲い、地主を殺害したので、日本人がやってくると、誰もが恐れおののき、満鉄の調査員と良好な関係などとはなかったと伝えると、内田氏は絶句していた。内田氏と同じく、満鉄の調査員だった旗田巍、安藤鎮正の両氏にも、冷水溝で地主が殺害された話をしたところ、彼らも戦前に調査をしていたときに、調査地で日本軍からの被害を質問すると、すぐに憲兵隊に連行されるので、そのようなことは聞けなかったと話していたのが印象的だった。

冷水溝のように、戦争の被害が直接

調査に影響する。我々の調査も、慣行調査のことを覚えている人、その時期の状況などをどの村でも聞いて回ったが、なかなか慣行調査を覚えていた人には出会わなかった。しかし筆者は、後夏寨で慣行調査を覚えていた老人と出会った。このときのことを鮮明に覚えている。調査団は、午前と午後、宿泊施設から村公所までマイクロバスで向かうと、インタビューに応じてくれる農民が迎えに来ていて、各グループがそれぞれ家に向かっていった。筆者は応答してくれる家の人とうまく連絡が取れず、1人村公所の入り口に取り残されてしまった。ちょうどそのとき、入り口の前に2人の老人が座り込んでいたので、市場に出かけたのかとか、清明節が近いですねなど、よもやま話を始めた。清明節の時の墓参りについて話が進み、墓の位置などを尋ねて、地面に墓の場所を描いて説明をし始めたとき、中年の男性が自転車を通りかかって「何やってんだ」と声をかけてきた。「昔のように考察団がきている」と答えると、驚いて、「昔とはいつの

ことか、解放前か」と聞くと、そうだという。隣にいた老人もうなずいて、彼らが小学校の頃、眼鏡をかけた日本人が自動車に乗って小学校へやってきて老人から話を聞いていた、と話してくれた。彼らは、満鉄の調査員が小学校の授業の休み時間に子供たちが集まるとアメをくれたので、恐れることなく日本人の周りに近寄ったことを鮮明に覚えているという。当時、日本軍は恩恵の県域に5人が駐屯するだけだった。彼は1933年生まれで、小学生のときだから、満鉄の後夏寨調査は1942年5月から6月なので、時間的にも符合した。

確かに、満鉄調査員は通訳を通じた調査という限界があった。しかし、だからと言って調査員と農民との関係は、支配者と被支配者のような緊張した関係だったのだろうか。私が1984年に、満鉄の重要な調査村の一つだった沙井村を訪れたとき、旗田巍の調査に当たっていた張瑞、張広志が存命で、旗田巍のことをよく覚えていて、懐かしがっていたのは確かである。そ

れを帰国後、旗田巍に伝えたと、やはり彼も会いたがっていたのが印象的だった。

満鉄は、確かに植民地経営をするために設立された会社であり、その調査部は満洲、そして華北の植民地経営の基礎となる調査をしていたのである。



沙井村（1984年8月） 左から筆者、張瑞、張広志。この2人は、1940年代、満鉄調査部でこの村を調査していた旗田巍の主要なインフォーマント。

その調査規模は膨大で、中国の1930年代から40年代にかけての社会経済史を分析するためには貴重な調査資料であることには相違ない。しかし、その詳細さと便利さだけを称賛すると、その調査意図まで肯定しかねない。そこで、その調査の背景や当時の歴史状況なども含めて、丁寧^{テイネン}に検討することで、その資料を活用することができるのである。

講演では、慣行調査に参加した山本斌^{ハヤシ}について紹介した。山本は、東京帝国大学法学部卒業で、語学に天才的な能力があり、一度外国語を聞くと暗記してしまうので、中国に赴任して、すぐに中国語をマスターし、宿舎の隣にロシア人が住んでいたので、ロシア語もマスターしてしまい、また北京の雍和宮^{ユンガク}に行き、そこで修業しているモンゴル人やチベット人のラマ僧と交際してモンゴル語とチベット語までマスターしてしまった。

東京大学の教授だった福島正夫は、戦後山本の経営していた書店に、時々立ち寄ることがあったという。福島夫

人から伺ったが、福島は山本のことを「有能だけど、自由人なので研究職には向かない」と言っていたという。

山本は、『中国農村慣行調査』が出版されたとき、岩波書店の広報誌『図書』に福島正夫とともに、慣行調査の思い出を書いている。福島正夫は、慣行調査の学術的背景をまとめているのに対して、山本は、調査のプロセスを、かなり具体的に書いている。例えば、「入村する。村公所や村長宅は事実上我々の調査のため占拠される。村公所の営む自治事務の外に、日本軍の徴発、鉄道の賦役、県公署の徴税、新民会の訓練指令等が山積し、村民全体が困惑苦吟していた時代のこと、村公所の使用丈でも、村の理事者にとって迷惑千万なことであった。村長、副村長、会首連は滞在期間中事実上釘付にされ、村の扶役^{ツカイ}は聴取調査に呼出された村民の狩出しに大童であった」と、村に入ってから、その調査の対応に追われる村人の様子が克明に描かれている。

調査班は、村に経済負担をかけない

ために接待費、調査謝礼費を用意していたが、客を大切にする中国人から過剰に接待され、「この種経費が村としては巨額に達した証拠は、村費内訳を季末になって決算し、村民に公開するために、村公所の壁に貼られた条単^{カネツダ}に満鉄班費の1項目があったことである。この経費が事変のためにギリギリの生活に追いこまれていた農民諸君の、ハケナシの財布の底を叩かしたのである。もとよりこの条単も我々調査の対象として取上げられ、御馳走になった金の出処まで詳細に調べあげることになるのであったから、まったく驚嘆に値する程の失礼な客であったのである」と、他の調査員の回顧録には書かれていない、まさに支配者による調査の実態を書いている。その後も、調査の様子を続けているが、最後にもう一度調査村に行き長年の非礼を詫びたいと結んでいる。山本は言葉ができるがゆえに、他の調査員とは異なって農民との距離が近かったことを窺わせる。

山本斌は、著書『中国の民間伝承』の中で、中国での調査経験から洪洞県

の移住伝説に関心を持ったと書いている。慣行調査が進展し、北京近郊の順義県だけでなく、河北省の欒城県や昌黎県と広がっても、同じような伝承を聞くので、大槐樹の存在を突き止めた思いが強くなり、ついに1941年8月に山西省を縦断する同蒲鉄道を南下して洪洞県まで行った。

山本が担当したのは、小作慣行と水利に関する慣行で、担当地域の順義県沙井村・欒城県寺北柴村・昌黎県候家営村で小作について報告書を書いているが、これらの地域は河川がない地域だったので、その後は天津近郊の大河川地帯の農村調査を単独で行なった。

先に述べたように、山本は語学に才能があったので、慣行調査の仕事が終息したのち、内モンゴルの調査などにも借り出されているが、それとほぼ同じ時期に、天津近郊で水利調査もしている。その中で、『新疆ニ於ケル楊柳青人』のように、年画でも有名な天津近郊の楊柳青の商人が清朝末期から新疆へ出稼ぎに行っており、日本軍の西北工作に必要な新疆情報を、楊柳青の商

人とその家族、そしてかつて新疆へ行ったことのある商人などから聞き取って報告書を書いている。

また、今年の夏、アメリカのワシントンDCの議会図書館を訪ねたときに見つけた、「天津県第七区小站地区ニ於ケル李秀山土匪ニ関スル資料」のように、新民会（日本の華北占領地に設置された民衆の親日化工作をする民衆機関）の工作隊が保管していた土匪（地方の盗賊団）の組織、成員、家族構成、所有する不動産とその地形図まで含めた詳細な報告書を書いている。

山本斌の、こうしたきわどいテーマでの調査は、必ずしも満鉄の慣行調査が、国策を基礎にして実施していたのではなく、山本の個性的特性で書いたものだと思う。山本斌については、別稿を書いているので、そちらを参考にしたい。

中生勝美「歴史認識と人類学——満鉄資料『新疆ニ於ケル楊柳青人』の分析を通じた日本帝

国主義の新疆戦略」『桜美林論考、人文研究』（9）、二〇一八年三月、一六七—一八二頁。

https://obirin.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=1984&item_no=1&page_id=3&block_id=38

（2022年10月19日・オンライン公開講演会）

筆者略歴（なかお かつみ）

専門は社会人類学、中国近現代史。著作に『中国村落の権力構造と社会変化』、東京・アジア政経学会、1990年。『近代日本の人類学史——帝国と植民地の記憶』東京・風響社、2016年。中国農村の社会、宗教、歴史および日本の人類学史についての論文多数。

公開講演会記録

中国語を生涯の友として

元会議通訳者 神崎多實子

プロローグ

「ブワウーッ」。突然、空気を震わせる凄まじい汽笛の音に、母に抱かれ見送りの人に手を振っていたわたしは、慌てて母の首にしがみついた。汽船は門司港の岸壁を静かに離れ、中国大陸の北の港、大連を目指し出航した。

1937年4月のことである。

この時、家族は父（37歳）、母（29歳）、兄（8歳）、姉（5歳）と2歳未満のわたしの一家五人。それにお手伝いさんが一緒だった。

これは後に母がわたしに語ってくれたことだが、日本を離れる前には、伊

勢神宮を参拝し、父の故郷広島に立ち寄ったとか。

父は、理化学研究所（以下、「理研」と略称、注）で放射性鉍物研究に取り組んでおり、すでに博士号を取得、中堅研究員として活躍していた。その後理研が中心となって1935年3月、「満州」における資源の「開発利用」を目的とする総合的な科学研究機関として首都「新京」に「大陸科学院」（現長春応用化学研究所）を設立した。父のメモによると、1936年に「満州」の主要都市をはじめさらに山海関を越え、北京や天津、通州（河北省）にも足を運び、治安状況なども含

め渡航前の調査をしたもようである。

父は「満州」で引き続き放射性鉍物の研究に従事するため大陸科学院に赴任することになり、1937年、一家をあげて「新京」に移住した。

父は、「満州」という新天地に大きな夢と希望を抱き、それから八年後、国家が崩壊し環境が激変することになろうとは夢想だにしていなかったのだろう。

だが、移住した年の7月7日に起きた盧溝橋事件を口実に、日本は中国への全面戦争を開始した。1945年8月15日敗戦、「満州」で敗戦の日を迎えた多くの日本人は、その日から国によるすべての庇護を失った。無政府状



NHK のスタジオにて（2020年8月）

態の混乱が続く異国の地にあって、誰もが自らの才覚で生き延びることを強いられた。それ以外に選択の余地はなかったのである。

比較的裕福であった私たち一家の生活は敗戦によって一変し、それから2年、最愛の母が結核を病み、再び日本の地を踏むことなく急逝した。その日からわたしの多難な人生が始まる。

やがて1949年10月、全土を制覇した中国共産党によって中華人民共和国が成立し、父は引き続き「留用」された。

こうしてわたしは戦中戦後の激変の期間、16年にわたって中国で暮すことになり、いまでも中国語にこだわり続け、中国とかかわることになる。つまり、冒頭で述べた一九三七年の移住が、わたしの人生行路を決定したのだった。

注：理研 1917年3月、政府からの補助金、民間からの寄付金をもとに東京文京区駒込に創立。「機械工業の時代から理化学工業時代に大転換を遂げつつある世界の趨勢を説き、日本

の基礎科学の振興を訴えた」科学者、実業家の高峰譲吉が、産業界の大御所渋沢栄一らの賛同を得て設立した。

「三つの中国」の狭間で

●「満州国」時代——幼き日々

幼少のころ、「新京」北安路のわが家の周辺は多分「満州国」官吏の住宅



①自宅玄関前で（1938年冬）



②自宅応接間にて

地だったのだろう、隣は朝鮮人、裏には「満人」（と言っていた）が住んでいた。隣の朝鮮人の男の子とは言葉が通じなくても遊んだりした覚えがある。ただ、中国人との接点はほとんどなく、わずかに母と一緒に買い物に出かけるときに乘るマーチョ（馬車）の馭者や家の前でサーカスもどきの大道芸を演じる悲しそうな少女のことぐらいで、「可哀そうな人ね」と思っていた。そのころ、大人たちがよく言っていた言葉に「ニーヤ」がある。それは中国人の代名詞のように使われていたが、多分中国語では「你呀」（ニーヤー）、相手に対する非難めいた言葉、「お前」といった意味の言葉に由来するのかもしれない。

当時の「新京」は東洋のユートピアと言われ、極寒の地でも、暖房が通れば家の中は温かく、トイレは水洗、白系露人のお店チューリン（秋林）に行けば、ジャムパン、クリームパンなどが並んでいた（写真①②）。

写真①は、玄関前。大連辺りで買いたのだろうか、今では生物保護法に違反しそうな「シューバー」といわ

れたヤマネコのオーバーを身にまとっている。写真②は自宅の応接間、ただ、わが家のサイドボードには、人形などではなく、石ころだらけだった。父が、興安嶺などの山奥に出向いては、ウラン鉱を探し求めているからである。部屋を暗くすると、不思議な青い光を発する螢石などもあった。

「新京」には、十数校の日本人小学校があった。教科は、「大陸事情」があるほかは、ほぼ内地と変わらず、先生も優しく、楽しい思い出が詰まっている。冬の体操（と言っていた）の授業はスケート、先の尖ったスピードスケートを履いて、校庭のリンクを一周すると凍てつく寒さも吹き飛んだ。音楽も「粉雪さらさらっ、街の粉屋も夜は更けて、ロバの目かくし外すころ…」など「満州」特有の抒情的な歌が多かった。

だが、1941年12月8日、太平洋戦争に突入してからは、徐々に戦時色が濃くなっていく。スケートは、雪の中の「進軍」に変わり、歌も軍歌が多くなった。習字も「不自由をつねと思

えば不足なし」、「欲しがりません、勝つまでは」のような節約や儉約を提唱するスローガンが増えてきた。

先の写真、見るからに幸せそうだが、実は手元に数葉しか残っていない。1945年8月疎開する間に、父がアルバムごとお風呂の焚口へ放り込み、燃やしてしまったからである。炎に映える父の形相を目の当たりにしてわたしは事の重大さを悟った。この炎とともに、数年にわたる「満州」の思い出は、一瞬にして灰と化してしまったのである。これらの写真は、母が日本に送っていたものを1953年に帰国したときに祖母が返してくれたものである。

思えば、当時「満州」の北の国境付近では、移住した日本人開拓民と土地を奪われた中国人農民とが対峙し、華北では日本軍による激しい戦闘がくり広げられていることなどわたしは知る由もなかった。

一方、同じ「新京」の中国人学校では、日本人学校とは異なる差別的な教育が行われていた。

いまでも交流のある、当時「新京」在住の中国人の友だちに尋ねてみた。

「小学校のころ、スケートしていた？」

「スケートなんか誰も持っていないから、やれるはずないでしょ。体操の時間は、騎馬戦なんかやっていた。それにしても毎日ヤオバイばかりやっていたなあ」。

「ヤオバイ」？、それが「遥拝」だと分かるまでに少々時間を要した。中国語の辞書を引いても、これはすでに死語になっている。日本人学校でも、毎朝朝礼があつてご真影を拝み、宮城遥拝をしていたが、彼ら（中国人）の遥拝は毎朝、東西南北各3回、計12回もお辞儀をするのだそうだ。「誰に向かってするの?」「よく分からないけど、たしか天照大神テイエンザオダーシエンって言っていた」。

わたしがスケートに夢中になっていたころ、彼らは同じ「新京」の片隅で、例えば「国語」の授業は、中国語と日本語が半々で、毎日、日本語を勉強していたそう。なかには日本語通訳二級程度の試験に合格する生徒もいたが、

いくら日本語を勉強してもどうせ2、3年のうちに使い道がなくなると秘かにうわさされていたとか。しかも冬季は毎日暖房用の薪持参で通学していたそう。

これが当時大いにもてはやされた「王道楽土、五族協和」の実態だった。

●敗戦、国共内戦の時代

1945年8月9日、ソ連軍侵攻。

「勝利、勝利」の宣伝に惑わされてきた在留邦人は、この日を境に大混乱に陥り、父の勤務先の大陸科学院一行は郊外の「浄月譚」（現長春国立森林公園）に疎開することになった。

一方、関東軍に帰属していた母方の親戚は、早くも12日には先を競って「新京駅」から列車に飛び乗り、途中シベリアへ連行された大叔父を除き、家族は朝鮮を経由して帰国する。わたしは「叔母様一家は、電話もしないで帰っちゃった」と母が嘆いていたのを覚えている。天皇の一種独特な声で始まる玉音放送は、疎開先の浄月譚で聞いた。大人たちがみな涙するので、わ

たしも訳も分からずに泣いた。

この後、引き揚げで帰国した日本の友だちもいたが、父が「留用」されたため、わたしは引き続き長春に居残ることになった。戦後、日本人小学校が再開されたのは、新憲法が公布され「日本は神の国ではなくなりました」と教わったので、おそらく1946年11月ごろ。校舎は「満州電信電話」の独身寮を改装したもので、校名は「日籍留用技術員工子弟学校」に変わった（写真③）。



③集合写真 戦後再開した長春の日本人学校 前から3列、左から4人目が筆者

しかし、間もなく国共内戦、八路軍（現人民解放軍）と国民党軍による国内戦争が勃発。長春はアメリカの援助の下、国民党の精銳部隊の支配下にあったが、徐々に困窮を究めて行く。当時近代的な戦闘を行うのは不利とみて、八路軍は正面切って国民党軍と対峙するのではなく、包囲網を張って持久戦に転じた。

父が手にする中国語の新聞には「^チ起義」（蜂起、寝返り）の文字が日々目につくようになる。八路軍は、土地改革を展開しつつ広範な農民を味方につけながら、戦闘を有利に進めていった。一方八路軍とは対照的に、国民党軍は徐々に孤立し、内部から瓦解が始まっていたのだ。

都市機能はマヒし、わが家も垣根のニレの葉っぱで飢えをしのぐありさまだった。国立長春大学に留用されていた日本人家族十数世帯と飢餓の町長春を脱出し、父の押すりヤカーを引いて「^チ子」に入ったのは1948年9月12日。チャーズとは、郊外の一角に鉄条網を張り巡らした中間地帯で、国民



④チャーズの出口でお粥を振る舞う八路軍兵士

りを持
ってき
くれた。
でも、
チャーズ
出ても安
心できな
い。1年
上の友だ
ちが流れ

党と共産党の暗黙の了解により、そこを經由せずに長春を脱出することはできなかった。
そこには数千人の難民がひしめいており、私たち一行が足を踏み入れた途端、新参者の到来とばかりに食糧を奪い、わたしの水筒もたちまち飲み干されてしまった。だが、食糧争奪の洗礼を受けたら私たちも同じ難民、地べたに横たわり、星空を見上げると、1年前に病死した母の顔が浮かんだ。
そこへ姿を現したのが、父たちを解放区に迎える任務を帯びた八路軍兵士。彼はかつて父の助手だった人の弟で、1年余り口にしていない白米のおにぎ

るのようだった（写真⑤）。そこを歩き交う人民服の女子大生が輝いて見えた。わたしは、いつしか父同士が同じ

弾に当たって即死した。
ただ、チャーズの外には草が生えていて、わたしは土手の野蒜^{のびる}を抜いて白い根っこの泥を払って口にした。遙か向こうには野菜畑が広がり、少し歩いた所で、八路軍からお粥が振る舞われた（写真④）。

●新中国との出会い

徒歩、荷馬車、最後はトラックでたどりついたのは父の新たな勤め先、解放区吉林の東北大学（現東北師範大学）だった。住まいは広大なキャンパスの一角にある官舎で、チャーズ生活からすると御殿



⑤奥の建物が講堂のある主楼

生が演じる歌や踊り、「白毛女」などの芝居にいつしか夢中になる（写真⑥）。
そして幕あいに学生全員で歌う「団結は力」「東方紅」などの歌の意味も知らずに口ずさんでいた。遠慮がちに後ろで観ていると誰かが席を譲ってくれるなどみんなやさしく、わたしはそのとき初めて中国人を身近に感じた。彼らは、いつか見た可

大学教諭の幼友たちと一緒に「晚会^{ワンホエ}」（文芸の夕べ）があると聞くと講堂に駆けつけた。舞台でくり広げられる学



⑥映画「白毛女」より

哀そうな中国人とはまるで別な人種ではないかとさえ思った。

思えば敗戦後わずか3年、父は再び中国人学生を相手に教鞭を執るようになった。中国語を話せない父だが、教え子から教わった歌をよく口ずさんでいた。その哀愁を帯びた歌は、革命の烈士を偲ぶ鎮魂歌であることを後になって知った。

人民の紅い五月よ、紅い五月

無数の烈士が血を流した。

点々とした血と涙は幾千幾万の灯となって

革命家の道を照らすよ。

その後1年足らずで、大学が長春へ移転するのにともない、再び長春へ戻った。父の強い勧めで後に改称された東北師範大学附属小学校、また中学校へ編入学。そこはまるで吉林のキャンパスの延長線にあるような雰囲気だった。最初に覚えた歌は「勝利の花が咲くよ、咲くよ、人民政治協商会議が開かれるよ…」、つまり中華人民共和国の成立

が宣言される晩、1949年9月ごろに覚えた歌だった。

辞書などはない時代だが、好きな科目は「語文」（中国語）で、リズムカルな中国語の美しさに惹かれた。

“你听见过海啸吗？ 你听见过万岁毛泽东的声音吗”（あなたは津波の響きを聞いたことがありますか？ 毛沢東万歳の叫びを聞いたことがありますか？）で始まるエッセー、“海^{ハイスアオ}嘯”が津波などということも知らない、まして海の記憶もないので、津波そのものも実感が無い。だが、意味は二の次、そのリズム感が心地よく響いた。

当時の東北部は、ソ連重視の教育で、外国語はロシア語、ソ連の生物学者、パブロフが、犬を使っておこなった条件反射の研究について、生物の女性教師が熱っぽく語っていたのが忘れられない。

また女性の解放には「経済的な自立が欠かせない」など、のちに生涯仕事をするようになったのも、当時の教育の影響ともいえる。

ただ、こうしたソ連一辺倒の教育は、

1960年代に周恩来総理の提唱によって是正され、外国語も国連公用語の英語中心になったという（『人民中国』2022年2月号）。

思うに、飢餓の町、長春を脱出してたどりついた吉林、父が教鞭を執ることになった東北大学のキャンパスは、解放区の中の真の解放区だったのかもしれない。10年近くを中国で過ごした



⑧中学時代の筆者



⑦担任の張孟君先生

当時13歳のわたしが初めて感動した中国であり、肌で触れた中国人だった。そこで大学生活を過ごした学生たちが、やがて長春の附属中学校に派遣されて、教師になり、わたしは彼らの薫陶を深く受けた（写真⑦⑧）。

二 帰国・通訳の道へ

1953年、帰国のときが来た。暑い夏の日、親しい中国の級友たちが長春駅まで見送ってくれ、涙の別れを告げた。



◎1953年10月舞鶴にて 後列右が筆者

錦州で引揚船の高砂丸を待ち、帰国したのは10月。デッキから眺めた青い海に浮かぶ日本の緑の島々にすっかり魅せられた。舞鶴に到着、初めて自分の足で踏みしめた美しい大地だった（写真⑨）。

だが、良きにつけ悪しきにつけ、いま風にいえばわたしは帰国子女だったのである。特別な計らいで都立大学附属高校（現桜修館）に編入学したものの、学生運動華々しいところで、次第に「わだつみ会」（日本戦没学生記念会）や「歌う会」の活動に惹かれていく。そんななか、中国からの帰国者を対象にした通訳募集があり、試験に合格、やがて高校在学中に通訳の依頼がくると授業はそっちのけで中国の代表団に随行した。

例えば、1956年梅蘭芳京劇訪日団の公演に合わせ、ひと月半ほど舞台裏の通訳を務めた。まもなく刊行される『周恩来の足跡』（村田忠禧氏監修）によると、梅蘭芳は新中国設立を迎えて、自らの劇団の処遇などについて悩んでいた。それをいち早く察知した周

総理は、「新しい社会になっても伝統芸術は珍重され、あなたの活躍の場は、国内はもちろん、海外でも大いにある」と励ましたそう。梅蘭芳は日本公演を成功させ、日本中を大いに沸かせた。別れに際し中国側は、日本側の舞台関係者全員に京劇の衣装を着けて、銘々写真を撮りプレゼントしてくれた。何という粋な計らいだろう。わたしは今も大切に持っている（写真⑩）。



⑩別れの記念に一日京劇俳優



⑪原水禁世界大会訪日団団長として来日した故魯迅夫人の許広平さん

その後、原水禁世界大会に参加するため来日した魯迅の夫人で女性活動家の許広平さん、劇作家の曹禺さん…、随行了た著名人は枚挙にいとまがない(写真⑪)。

また、中国で出版する日本語雑誌『人民中国』の編集者からなる代表团は南から北へと100回に及ぶ読者座談会を行って、交流を深めるなど、これら草の根交流は、やがて日中国交正常化への道を切り開く土台を築いたと言える。

わたしは高校のときから生涯通訳の道を目指すつもりはなかったものの、結果的には中国語通訳者として生涯中国語と共に歩むことになった。それは通訳として代表团の方々と共に日本各地を回る中、起居を共にし、彼らの人柄にはれ込み、ますます中国にのめり込んでいった。その裏には、青年期を日本で過ごし、当時対日政策を指導していた周恩来総理はじめ日本通の廖承志氏(中日友好協会初代会長)らの深い見識によるところが大きかったと思う。わたしは、サブ通訳者として195

0年代に中国から派遣された代表团に随同行し、仕事を通じて中国語に磨きをかけることができたが、東京外国語大学の入試は、1次試験の語学はともかく、5科目に及ぶ2次試験は滑った。思うに役立たずの駆け出しのころから数えると通訳歴六十数年、中国語研修学校やサイマルアカデミーの講師歴も50年近くを数えるが、わたしが今日あるのは、中国の偉人の言葉を借りれば「泳ぎの中で泳ぎを覚え、実践、理論、再実践…」の道を歩み続けてきたからにはかならない。いわば通訳の実践の中で語学力を磨き、理論とは、囲碁に喩えれば感想戦のようなもので、通訳をふり返って反省し、総括し、充電に努めた。

三 日中国交正常化50年にちなんで

●「迷惑」論

1972年9月29日、50年前の国交正常化の日、わたしは中国研究所所属の中国語研修学校で受講生たちと一緒に

に興奮冷めやらぬ思いでテレビを観ていた。

当時は中国の文化大革命の煽りで、代表团の来日も少なく、わたしは1968年4月から同校で中国語講師を務めていた。

正常化の後しばらくして、新聞を通し田中角栄総理の「迷惑をかけた」、それを通訳者が「添了麻烦ティエンラ・マフアン」と訳したことによる問題発言を知った。ただ、「ご迷惑をおかけしました」と言われたら、多分わたしも「添了麻烦」ととっさに反応したと思う。

だが、その一言で、宴会場は一瞬にして白けムードが漂ったという。これでは、まるで女性のスカートに水をかけ、「濡らしてしまつてごめんなさい」程度に謝ったに過ぎず、8年に及ぶ日中戦争(中国では抗日戦争)によって多くの惨禍を被り、数千万人に及ぶ人々が犠牲になった戦争の代償への謝罪の言葉ではないとして中国側が激怒したそうである。田中総理は、「『ご迷惑をおかけした』というのは、日本人が心から謝罪をするときに使う言葉です」

と周総理に説明したそうだが、日中双方が口角泡を飛ばし激論をおこなったことは想像に難くない。

その後、深夜に突然、田中総理と周総理が毛沢東主席の部屋に呼ばれ、毛主席は2人に向かって「喧嘩はもう終わりましたか？」と聞いたとか。

その後、毛主席がにこにこしながら『楚辞集注』を田中総理に贈呈し、レモニーは終了。雨降って地固まる、双方はこうして和解にこぎつけ、日中正常化の道は固まったようである。めでたし、めでたし。

●切り立った稜線を行くが如く

1990年からわたしはNHK・BSのCCTV（中国中央テレビ）ニュース番組の放送通訳のほか、フリーの通訳者として仕事をした。

エージェント経由で頼まれる仕事は、中国や台湾地区での会議通訳、また政界の要人に同行しての訪中もある。なかでも総理の通訳としての訪中は、まるで切り立った崖の稜線でも歩くかのようで、一歩誤れば奈落の底、正確さ

が過酷なまでに要求される。そして一方では情報を即刻、茶の間に届ける必要に迫られる。

1994年に細川護熙総理はじめ、その後橋本龍太郎、小渕恵三総理の中国訪問に当たり、北京で記者会見の通訳を務めた。外務省の慣例として外部の通訳者が担当するのは、外国訪問の最後のまとめともいえる記者会見の通訳のみ。両国首脳の会談や、各地の視察などはすべて外務省の通訳者が担当し、3日間の訪中なら、その締めくくりの最終日の一時間ほどの記者会見が外部通訳者の出番である。

最初の細川総理の記者会見のときは同時通訳ではなく、逐次通訳で行われた。まず事前に首相官邸へ出向いて顔合わせがあり、外務省の随行スタッフ数人と一緒に執務室を訪れ挨拶をする。小1時間のミーティング、スタッフが訪中の趣旨などを総理に説明するのを拝聴した。

だが、訪中の日が近づくに連れて、不安が募る。テレビのニュースなどで

細川総理を見かけたりすると、すかさず聞き耳を立てる。また総理がアメリカを訪れた際、記者会見の通訳を務めた英語通訳者にも尋ねてみた。「何が大変って、話が長いよ。切れ目がないの：」、この一言はわたしにとってかなり衝撃的だった。総理の通訳をする以上、一つ一つの訳語に注意を払うのはもちろん、全体の流れをつかんで忠実に、言い落しがないように最善を尽くさなければならぬ。話が長くなると通訳はどうしてもおおざっぱにならざるを得ない。

そこで北京に着いてから記者会見を取り仕切る報道官に率直に質問してみた。「首相は、スピーチが始まると淀みなく話されると伺ったのですが、それが心配です」「そのときは割って入ってけっこうですよ」報道官の答えはいつも簡単だった。

「割って入る？」、これはあたかもわたし慣れ親しんだトランプ遊び「ノーランプ」のジョーカーのようなもの。土壇場でジョーカーを使ってリスクを回避するか、使わずに温存させるかど

うかの決断を迫られる。

ところがいざ記者会見が始まったら、意に反して早々に使わなければならぬ羽目に陥った。冒頭の挨拶の部分は一応内容を知らされていたので多少長くても差し障りはないのだが、質疑応答に入ってからかなり長く話される。舞台の裾から「そこまでにしてください」という気持ちを込めてそれとなく右手を差し出した。首相はすぐに気付いて話を止めてくださった。フォルクスワーゲン（「大衆汽車」）などメーカー名やいろいろな単語が出てきたが、そこはどうか切り抜けることができた。

だが、その後も期待したほどジョーカーの効果は続かず、朝鮮の核疑惑の問題など、第一、第二、第三という具合に熱がこもり、切れ目なく延々と続く。わたしはまたもや「待った」をかけたくなったが、首相の話をそうむやみに遮るわけにはいかない。このような葛藤の中、記者会見の通訳は終わった。この記者会見の様子は、NHKでかなり大々的に実況放送され、日曜の大相撲の後というせいもあって、高い視

聴率だったようである。

「声ですぐに判りましたよ」という励ましの言葉とともに、同僚からは「首相の言葉を遮ったそうじゃないですか、よくやれますね」といったやや非難めいた声もあった。通訳者には守秘義務があるが、すでに時効、「割って入った」のは、暗黙の了解を得てのことである。

ただ、せっかく楽屋裏でいただいたジョーカーだが、舞台では乱発するわけにはいかなかった。

それにしてもこの会見では、先の戦争についてとかく齟齬が起きやすい「ご迷惑」という言葉はなく、「戦争の責任を痛感し、深く反省する」と表明されたのでありがたかった。

●友情よ、永久に！

では、正常化から50年を迎えた昨今の日中関係はどうだろうか？

思えば、めざましい発展を遂げた中国の光の部分とともに影の部分も浮かび上がってくる。中国は切り口によって様々な顔が見えてくるので、その捉

え方がまちまちであることは否めない。

だが、5千年の歴史をもつ中国への尊敬の念を忘れてはならない。たとえば年号「令和」の語源が『万葉集』に由来するとしても、私たちが日ごろ愛用している漢字はもともと中国から伝来したものにほかならない。

また、メディアの影響も大きい。世界に国家というものが存在する以上、メディアにそれぞれの立場が存在するのは、当然だと思う。だが、日本のメディアがすべて公正公平で、民主的だとはいえない。NHKには素晴らしい番組があるのは事実だが、ニュースの取捨選択において政権の意向に左右され、必ずしも客観的とはいえない場合もある。わたしが通訳してきたCCTVのニュースでは、中国が人道的な立場からウクライナに医薬品などの支援物資を送っているというトラック輸送の30秒足らずのシーンでさえ、採用するか否かについて、現場では決められない。

ましてや一方的に「沖縄県大閣諸島」と表示するのは、国交正常化によって

なされた暗黙の了解に背くのではないだろうか。これでは世論を「相互誤解」へと誘う可能性もある。いまこそ初心に返り「小異を残しつつ大同に就く」べきではないだろうか。次に担当した小渕総理の記者会見でも、朱鎔基総理の『言は必ず信あり』（約束は必ず守る）、実際の行動で示してほしい」という言葉を引用し、強調されている。

最近の世の中の動きをみていると、およそ80年前に戦争を仕掛けたのは、どこの国だったのか忘れてしまったかのようにすら感じる。1960年、反安保闘争が華々しく行われていたころ、中国の陳毅副総理兼外相は、中国を訪れた野間宏氏を団長とする日本の作家代表団に次のように言ったそうである。「仮に中国が過去の戦争にこだわって日本を憎しみ続け、一方日本は過去の戦争をすっかり忘れ去ってしまったら、両国は仲良くやっていけません」。いま私たちは、60年前のこの言葉を



⑫同級生たちと北京の張孟君先生宅を訪問（2015年5月）

もう一度、反芻すべきではないだろうか？「敵基地攻撃」を、「反撃」と言い換えたところで、かつて人様の国土を踏みにじったのは、いったいどの国だったのだろうか。世界情勢がいかに

に変化しようとも、憲法の手精神を守り抜き、隣国同士の子々孫々に続く友好を願わずにはいられない。

わたしの母校、長春の附属中学時代の級友たちとの友情は70年経った今も続き、中国版SNSを通じて交流している。友だちグループの名称は「友情よ、永久に！」である（写真⑫）。

（2022年12月8日・公開講演会）

筆者略歴（かんざき たみこ）

東京都生まれ。幼年期に中国へ渡航、1953年帰国。都立大学附属高校卒業。北京・人民画報社、銀行通訳などを経てフリーの通訳者に。2022年3月NHK・BS放送通訳退職、通訳歴60数年。またサイマルアカデミー講師を務める。2022年6月JACI（日本会議通訳者協会）「特別功労賞」受賞。編著書に『中国語通訳トレーニング講座―逐次通訳から同時通訳まで』『中国語通訳実践講座』、神崎勇夫遺稿集『夢のあと』（いずれも東方書店）。

報告

神田小川町
「漢陽楼」食事会

村田嘉明（会員）

協会監事の佐藤嘉信氏の呼びかけで

「周恩来ゆかりの店・漢陽楼」で会員
昼食会に参加した。神田小川町「漢陽楼」は明治時代から続く中国浙江料理
の名店だ。中華人民共和国建国の功労者・革命家周恩来は天津から1919
年〜1921年（19歳〜21歳）日本に留学を果たした。中国人留学生が多く
住む神田界隈の学生下宿に住み、足しげく通っていた店が「漢陽楼」で、故
郷・浙江省の故郷の味を楽しんでいた。2022年11月8日、正午に参加者
7名が「漢陽楼」で中国料理のランチに舌鼓を打った。参加動機は2022
年9月29日（50年前の日中国交正常化調印）のNHK特集「日中国交正常化
50年」で、直木賞作家、浅田次郎が「漢陽楼」の円形テーブルで「肉団子
スープ」や「獅子頭」を食べている映

像を見た。テレビ視聴時、この明治時

代から

営業し

ている

「漢陽

楼」で食事をしたと思っていたと

き、会員の佐藤嘉信さんから食事会の

案内を受け申込んだ。

映像では協会会員の古海建一さんと
田畑光永さんが取材を受け、出演された。参加者は食事会幹事の監事佐藤嘉
信さん、常任監事の藤沼哲朗さん、前理事の佐野吉秀さん、監事の塚原美津
子さん、常務理事の渡辺澄江さん、理

事の日野正子さんと私である。

この歴史ある中国料理の名店で会員

交流ができたことは収穫だった。

着席した円形テーブルの壁に周恩来
が19歳のとき、日本留学出発の前夜につくった七言絶句「大江歌罷」の額装
が掲示されていた。次はその邦訳。漢陽楼店内集合写真（テーブル後ろの周
恩来の「大江歌罷」の額前にて）

長江に歌うのを止め、意を決して
東の日本に向かい科学をしっかり
学び、貧しい祖国を救おう。達磨
のように10年間、壁と向き合い、
その壁を破ろうとし、それが果た
せず、海を渡るのも、また英雄だ。

「漢陽楼」の初代店主の顧雲生は周
恩来と同じ浙江省出身、ロシア銀行の
厨房で働くも失職、中国人向け下宿を
開業したが、1911年の辛亥革命で
日本への留学生が減り下宿業は難しく
なった。留学を終え帰国する留学生が、
お世話になった「お礼」にと漢陽楼の
屋号と手作り看板を店主に寄贈し創業
した。

漢陽楼は漢民族を燦々と照らす楼閣
の意味、当初は留学生専門の店、一階
は食堂、二階は留学生の溜り場、周恩
来は慣れない日本食が口に合わず漢陽
楼で故郷の味、肉団子スープ蒸「獅子
頭」などを食べ故郷の味を楽しんでい
た。当時の神保町は140店もの中華
料理店が並ぶ中華街、学生街だった。

是彼會員

アントニオ猪木氏を偲ぶ

伊大知重男（会員）

空襲でも焼け残ったビルが町中から一つ一つ消えていった昭和30年前後、庶民が渴望した身近な娯楽と時のヒーローはプロレスの登場によって実現した。

その関心度合いは、野球の巨人の選手の動静より断然上であつた。第一、子どもより大人の関心の方が大きかつた。

テレビが一部で普及し始めたが、まだ街には野外テレビも都心に設置されていた。その未来的な新しい文明の利器であるテレビも一般家庭にとつては、当然、高嶺の花であつた。価格は一流会社の課長職の月給の10倍以上したのではないか。ただ、客寄せに十分にその役割を持った利器のため、ラーメン店にはいち早く登場した。客の目当ては、力道山のプロレス試合を見るためにだけにテレ

ビのあるラーメン店に入つた。試合のある日はラーメン店の席を取る事が、すでに試合への興奮の序章でさえあつた。

浜町の先、人形町の近くの旧電電公社ビルの半地下にプロレスの練習場・ジムがあつた。通里から覗ける位置にあつたため、たまに時のヒーローを見つけに行つた。でも、知っている顔はいなかつた。ヒーローに会えると期待した子どもとしては、力道山か、クルスカンプ、木村政彦、豊登あたりしか見分けることができない。その程度の情報量であつた、致し方ない。だが、ここに来ると、ますますプロレスが身近な「何か」となつていった。

昭和33年、兄昭司が米国に留学のため、羽田より飛び立つ日、偶然、生身の力道山を

空港ロビーで見かけた。赤いジャンパーを着たカッコいい人物であつた。別に周りに多くの人が取り巻いている風ではなかつた。それが、余計、周囲とは違つた雰囲気を感じ出していった。

威風堂々として、そして何よりもアメリカ的スマートさが感じられた。その力道山が見出した弟子であり傑物がアントニオ猪木氏であつた。そして後年、その業界の宝となり、長年、業界を越え永田町とピョンヤンにも聞こえたレジェンドであつた。

中国温州駐在より帰国した2009年、WAY2の福田氏に誘われた。氏曰く「六本木のクラブが今夜で閉める故、感謝のため、今日の飲み会はただである」。そこに一緒にしようとのことであつた。別に断る程もないと思い、福田氏の誘いに乗つた。場所は、六本木アマンドの裏手の坂の途中のビルにその店はあつた。確か、夕方、6時ちょっと過ぎに入つたと記憶している。店に入ると、20人以上は入れる店なるも、

先客は3〜4人であり、開店直後の静けさと、照明を抑えた品の良さが漂つていた。1〜2杯水割りを飲んだ頃、福田氏が、他にあまり客がいない故、私に「カラオケ」をやるように、妙に勧めてきた。何しろ、私にとつての苦手なことの1〜2番が「歌」故、相当躊躇したが、福田氏のおだてが効いてきて、

それでは、1曲と、舞台仕様の台に立つた。曲は坂本冬美の「火の国の女」である。まあ、これぐらいしか、他人に聞いてもらう「ネタ」はない私である。客が少ないことに勇気付けられ、カラオケを開始した。1番から2番に移る頃、店のドアが開いて、大男を中心に3〜4人が入つて来た。おお、その男の首には白い大きなマフラーが巻いてあつた。まさに、彼、アントニオ猪木であつた。私は2番から3番と、それなりに高音を出し、どうやら気持ちよく歌い終わった。やや、ホツとして自分の席に戻つたと同時に、前3〜4メートル前にいた巨漢、

アントニオ猪木が真面目な顔をして、目線を私に合わせて、両手を出し握手を求めてきた。彼の眼は穏やかな笑みをたたえていたが無言であった。私は瞬間的に「人違い、誰かに間違えての挨拶」と思った。が、私にもこやかに笑みを浮かべて失礼に当たらないよう、挨拶を返した。その後何杯か水割りを飲み、福田氏のカラオケを聞き、そろそろ、私は帰り支度を始めた。その時、また、アントニオ猪木が立ち上がって、先ほどと同じように、にこやかに両手を出し握手を求めてきた。私は、また、無言で丁寧に返礼し握手をした。福田氏は私が店を出る際に、アントニオ猪木にビンタをもらうため、一人残った。(当時、猪木のビンタを受けることで元気をもらい、加えて、とても光栄であることが流行っていた)。

その時から、数か月後、福田氏に仕事の事で会った時、お互い、先の六本木の夜の思

い出話をした。かねてからの私の疑問、「あの時の、猪木は私を誰に間違えていたのかな?」と福田氏に話題を振った。すると、私としては、信じられない事実が福田氏より聞かされた。「伊大知さん、猪木は誰か知人と伊大知さんを間違えたのではないのです。猪木が言うには、伊大知さんの歌に感動して握手を求めた、と言っていました」と、全く、驚天動地の事実であった。

「ええ、そうなのー」と絶句したことを覚えている。

実は、この六本木の稀有な驚いた出来事をさかのぼると、数年前、故あって韓国ソウルに行った。そのおり、かつての仕事の相手であったSK化学の幹部の人より、夜、一席を招待された。当時、ソウルで一番という「チョソンHOTELの寿司」をごちそうになり、そのあと、ナイトクラブに連れていかれた。その店は地下にあり、落ち着いた雰囲気を感じられた。客は、

すでに、20人以上おり、店はなかなか賑わっていた。我々も飲んで会話が進み、一服した時、たまたま、生バンドを背景に歌う客が途絶えた時であった。SK化学の彼は、何か歌えとしきりに勧めた。私は、例により、躊躇していたが、日本語であれば、他の客に余り迷惑をかけず、私の恥も、軽減されると勝手に解釈し、勇気が出てきた。生バンドの人は日本語に問題なしとのこと。それでは坂本冬美の「火の国の女」はできますかと聞くと、OKの由。これで決まり、歌おうとなった。こざっぱりした舞台へ、淡い光線に照らされながら恥じらいつつ立ち、バンドのいかにも、プロらしく歌い手を自然に乗せる伴奏に合わせて、声高に歌い始めた。特に歌詞の中にある「熱か」の語句は意識的に熱情を持って発した。言うなれば裂けくの気迫を込める気持ちで、力強く山場を創る気持ちで表現した。1番、2番

の最後尾は、私の声の特長の高音を目一杯伸ばして、残景を引きずらせた。3番まで歌い終えたと同時に、全く予期せぬことが起こった。店の客20人以上が全員立ち上がり、スタンディングオベーションと拍手をしてくれたのである。私は声も出せず、ただただ、啞然とした。このびっくりした出来事は、今、思い出しても「あれは本当に起こったことなのであろうか?」と不思議な想いとして、鮮明に記憶している。特に、SK化学の人が、とても喜んでいたことを覚えている。人生は、なかなか面白い出来事を私に用意してくれていた。

ソウルのナイトクラブの出来事が、ピョンヤンで、名を聞こえた猪木氏を六本木の夜で私に引き合わせたのである。

アントニオ猪木氏のあの柔らかく、大きな手の感触は、何とも表現しがたい温かみを、今なお、私に残している。

陶々俳壇

陶陶句会
結果
2022年6月

兼題 「さくらんぼ」「筒」 馬場由紀子

兄ちゃんは一っ多いとさくらんぼ 松島二三四

◎明良 目を皿のようにして分けられた粒を争う子どもは純粹です。

◎善一 母親がいたいたものを兄弟に分けてあげる。と弟がそれを見て、お兄さんの方が一粒多いとわめいている様子が見えます。

◎正堂 口語を上手く句にしている。「軽み」の効いた佳句。

◎由紀子 走り梅雨貼り直されし尋ね猫

◎正子 いなくなった猫が心配で心配でならない。そろそろ梅雨に入るのにどうしているのだろ。早く帰ってきて、と飼主の悲鳴が聞こえる。内田百閒なら小説にしてみよう。なるほどと思う表現です。

◎善一 五月頃梅雨入りする前、何となく梅雨を思わせるような気がついて、「尋ね猫」のほり紙が、傷んでいるのに気付く。貼り替えた。見つかるかと思つ量もまを良し。

◎正堂 実梅落つ売りの札ある広き庭

◎明良 街はずれの我が家は近隣の広い農家に囲まれた猫の顔ほどの庭で残念。

◎正子 静けさの中に梅の実の落ちる音。見ると空き家の庭に採り手のない梅の実が落ちるままに転がっている。

◎善一 通りに面した家の広い庭先に、梅の実ったのが落ちてゐる。その庭先に「家売ります」と提示してある。静かなたすみが感じられる。

出羽三山法螺高らかや山開き 大内善一

◎正堂 出羽三山の山開きに法螺が高らかに鳴り響

きその景が浮かんでくる。

◎二三四 山開きのスケールの大きさ、力強さがびんびん伝わってくる。

◎由紀子 競べ馬筒音重く響かせて

◎二三四 競馬の躍動感が伝わっている。

◎由紀子 相馬の馬追。

◎正堂 尾瀬に舞ふ魔神のごとき黒揚羽

◎由紀子 妖艶な黒揚羽を尾瀬の魔神と表現された。

梅雨時に筒で守りし設計図 瀬崎明良

◎正子 重く湿った空気とヒンと張り詰めた気の取り合わせ。

◎由紀子 面白いところを目を付けられた。ただ、「梅雨時に」などと出だしが散文調になつては興醒め。「黒南風や」とか「梅雨の雷」などの方が引き締まると思うのだが。

筒開けて新茶の匂い朝け卓

◎正子 日々新しい日常です。

◎善一 朝餉の折、新茶の入った筒を開けると、一瞬にそのかわい香がただよってくる。その景も良し。「朝け卓」を再考。

うなぎ捕り筒上げる手に力込め

◎正子 筒の中でウナギは暴れているのでしょう。

◎正堂 山桜地を黒く染むるさくらん坊 日野正子

◎明良 小さな実を食べてみますが味がまいちです。歩く都度残念です。

●由紀子 「山桜の実」で仕立てても。

水浮かぶ花悲し美しオフェリアのごと

●由紀子 「オフェリアのごと躑躅悲しく流れけり」と添削。

松の芽や伸びに伸びたり鬼の角

●由紀子 三段切れを回避したい。「荒ぶるや伸びに伸びたる松の芯」としても。

◎明良 青空の恵みが採られ箱に詰められてなお艶やか光るさまが何かを語っています。

隠元の蒔どき違え長く採る

◎正子 卒寿過ぎ早歩きする夏の道

●正子 ご努力に感謝します。

さくらんぼ舌を丸めて飛ばしつこ 橋本紅杓

◎明良 なにをしても楽しい頃を思い出します。

◎善一 わが故里福島は「さくらんぼ」が名産でこの庭にも植えている。子どもの頃このように飛ばしつこをしていたことを思い出した。

◎正堂 筒は眺めるものと藪の主

◎明良 眺めてもよし喰つてもよしでしょうか、厚い皮をむいて残るわずかな中身ぞ句の味です。

◎二三四 竹林を持つ人の悠々とした風情。

●正子 初夏や手つなぎ登校一年生

●由紀子 明るい句。ただ、季語が動くかも。

水羊羹出湯の疲れの癒えどころ 馬場由紀子

◎正子 温泉にゆったりと長いこと浸かり、その湯疲れを癒すのが、薄甘い水羊羹である。

◎二三四 熱めの温泉で湯あたりきみの体を水羊羹で冷やす。粹ですね。下五「癒えどころ」はちょっと出てこないです。特選として（さくらんぼの句）も迷いましたが、水羊羹の涼やかさに参りました。

●明良 長風呂は快い疲れが出ますが冷たい美味し水羊羹が癒してくれま

◎正堂 筒井筒二人きりの水あそび

◎二三四 糟糠の妻と井戸、古き良き日です。

◎明良 他所行きの顔して摘むさくらんぼ

◎正堂 言われてみれば、さくらんぼは少量を上品につまんで食べるイメージです。さくらんぼを食べているだけの光景が一気に意味を帯びてくるよ。」「他所行き」が秀逸。

陶々俳壇

会 句 陶 陶
結 果
2022年 7 月

兼題 「トマト」「帰」

馬場由紀子

庭の闇十葉白の花明かり

日野正子

◎紅杓

特異な臭気を持つとくだみは闇に映く白い十字花が印象的であるが花のように見えるのはつぼみを包んでいる葉が変形した苞片をいう。花が満開で、夜でもあたりがほの明るく感じられるほど群れて咲いていたのである。「十葉の十字聖なる花明かり 松山寿美」「たそがれや十葉群れて花明かり 正木和子」なる例句がある。

◎正堂

◎善一

庭の木陰の暗い闇の中にボツカリと白い十葉の花が明かりを灯したように咲いている。よく観察して良い句に仕上がっている。

◎二三四

ドクタミは湿った薄暗い場所を好みますが、あれはわたしに光を与えてくれているのです。

井戸水に浮かぶ炎天挽ぎトマト //

◎正堂

冷たい井戸水に、挽きたてのトマトが浮き沈みしている景は涼しい。

◎明良

◎由紀子

面白く景。「炎天」と「トマト」の季重なりはあまり効いてないので「炎天」は割愛。「井戸水に浮かぶトマトや日の雫」ではいかがでしょうか。

灼熱で昔福耳今難聴

瀬崎明良

◎善一

灼けるような真夏の炎天下、知人から声をかけられても気付かず、昔はそのようなことがなく、大きな福耳をほめられたことがあったと苦笑いすることだった。

●由紀子 「で」はこでは使わず、「や」としたい。

帰りなん 鮎を追ひたる 室見川 //

◎二三四

室見川は福岡県糸島市から博多湾に注ぐ川で、溪流の美しさでも知られるとか。作者は幼少期その溪流で鮎を追ったのでしょう。帰りたい、でもおでうく簡単には帰れない。鮮やかに魅る涼しげな景に、夢の望郷の想いが重なります。

◎正子

◎由紀子

望郷の思いを募らせる。

温暖化をとこもすなる日傘かな 松島 二三四

◎正子

◎紅杓

新しい風潮を「をとこもすなる」と古典を引いて揶揄したところが愉快です。温暖化は自然現象の場合もあるが1800年以降は人間活動が気候変動を引き起こしており、その主な原因は化石燃料（石炭、石油、ガスなど）の燃焼によるといわれる。今年は梅雨の終わり頃から異常な酷暑に見舞われたが、男でも雨傘を目傘代わりにしたくなる。

緑陰の舗道マックのデリバリー //

◎由紀子

すっかりお馴染みのデリバリー。マックという若者の利用が多いファストフードの配達員が緑陰で休んでいる景は、若さだけでは乗り切れない社会の有様と異常な暑さとを暗示しているかのようだ。

手術終へ無事生還梅雨明ける 橋本紅杓

◎由紀子

手術を無事に終えた安堵の気持ちと梅雨明けの晴れやかさが響き合っている。「無事に生還」と、中七を整える。

●明良

●二三四

おめでとうございます。梅雨明けの解放感もひとしおのことでしょう。

●正子

慣れぬ暑さゆえ一層御身お大切に。

稲妻や牧の放牛たぢろがず

大内善一

◎正堂

◎紅杓

稲妻は歳時記では初秋の季語だが、牛が雷鳴におどろいて柵を壊し逃げ出したり、落雷により畜舎が焼け、牧畜が焼死したりする例はあるらしい。句景ではまだ稲妻だけで本格的な雷鳴に至らない状態なのであつ。稲妻の緊張感とどっしりした牛たちの対比が際立っています。

◎二三四

◎正子

小さき畑やうやくトマト熟しけり //

◎明良

◎正堂

◎由紀子

これでは散文になってしまつので、「トマト熟る小さき庭の小さき畑」と。

進む若さありけり蕃茄熟れ 馬場由紀子

◎明良

◎善一

◎紅杓

進む勢いが感じられて若き日が偲ばれます。若々しい赤く熟れたトマトを「進む若さ」という贅辞は妙。完熟して真っ赤になったトマト、日中についた養分を夜にかけて実に蓄えるので、収穫は朝の早い時間帯に行つのがベストらしい。

子供らにそれぞれの神三尺寝 //

◎二三四

子供たちの昼寝する姿を見守る親の視線でしうか。寝顔、寝相が導く様子を、それぞれ神が宿っていると見立てています。ほほえましい光景の中、一人一人への愛おしさがにじみ出ています。

◎正子

【ちょっと一言】

七回目のコロナ感染者拡大となっています。ウィルスは性質を変えていくと纏わり付いてきます。何年にもわたる慢性的にストレスとなって気持ちを押しつぶされていきます。

慢性ストレスは脳の制御能力を低下させます。ここから脱却する簡単な方法に、目の前にある何かに取り組むというのがあつて、それは、掃除でもアイロンがけでも書でも、もちろん俳句でも良いわけです。力まず、でも力作を詠んでいきましよう。



動物園からライブ配信の意義

先日、南京市紅山森林動物園が2回ライブ配信を行ったところ、48万人が視聴した。さらに、配信中、のべ16万人の視聴者から累計240万人民元へのぼる寄付が寄せられた。

ライブ配信は動物園がコロナ禍で直面した財務危機と直接関係がある。動物園はたとえ入場者がゼロでも動物たちを食わせなければならない。

南京市紅山森林動物園は国

内唯一の独立採算の事業単位（政府系社会サービス組織）の動物園で、収入源の80%以上は入場料だ。コロナ禍の2020年の損失は3千万人民元、コロナ禍以前の年間収入の40%にもなる。一時は口座残高が50万元まで減った。

現在、中国国内の大部分の動物園は政府系で、コロナ禍の影響を受けても財政保障があるため通常に運営されている。つまり閉園や身売りを余儀なくされる外国の動物園に比べればまだ安心なのだ。

今回のライブ配信で集まった寄付は相当額といえるが、動物園の運営費をそれに頼るのは現実的ではなく、持続性もない。また、「真実の自然と人間社会をつなげる」という動物園の基本的使命に反する。ライブの最大の意義はより広範な大衆の注目を集めることではないか。

動物園の経営難がもたらす

悲劇の最たるものは、園内の動物の幸せが損なわれることだ。閉園は動物保護の観点から大きな損害と言える。動物は不平等、虐待、殺戮に対して抗議できない。彼らの命運は人類の手に握られている。立場の弱い動物たちに言わせれば「見てもらう」ことが重要なのだ。

実際のところ、見る人がおり、気に掛ける人がおり、情報 transparent に公開され、自由に公開討論できる状態があつて初めて、支援は現実のものとなる。そして支援がなければ動物は災いから逃れることができない。

『新京報』2022年11月10日

多発する光害訴訟

野外広告、看板やライトアップなど都市の光は、排出ガス、廃水、騒音などと同様に市民生活を悩ませている。

上海の張さんのマンション

の部屋はちょうど隣の棟の屋上にあるテニスコートと同じ高さになる。当初夜間営業はなかったが、今年8月に照明設備を増設した。照明を点灯すれば太陽のような明るさだ。張さんの部屋にもカーテンをつきぬけて光が差し込む。

テニスコートの責任者に取材した。利用客の要望で照明を一新したところ住民からの不満が噴出して、困惑しているという。現在管理会社の仲裁により、照明の改修と21時消灯が決まった。

宝山区に住む周さんのマンション棟は塀を隔ててスーパーマーケットと隣接している。

店は夜間に商品搬入するため、に街路灯とサーチライト照明を増設。これらとトラックのライトで眠れなくなった低層階の住民たちは店に文書で抗議したが返答はない。そこで市民苦情センターに電話したところ、サーチライトだけは

落とすようになった。

新しい条例では光源の種類別に管理責任部門を細かく規定している。だが、実際はサーチライト照明のように居住スペースに直接差し込む場合でないと都市管理部が排除命令を出せないというような難しさもある。

専門家は議論の前提となる光の種類や強さ、時間、色など光害認定基準が示されていないことが問題だと指摘する。

『解放日報』2022年11月14日

温かみのある医療の一端

陝西省のある病院には半月前、重症患者に付き添う家族のためのカプセルベッドが設置され運用も順調だそう。カプセルには空調もあり機能は客室と同じ、利用料金は24時間50元だそう。同病院の馬医師が動画で紹介して多くの賞賛を得た。それだけ人々が困っている問題なのだ。

長期付き添いの家族は精神的にも体力的に厳しい状況にある。彼らのほとんどが寝具持参でやってきて、折り畳み椅子やベッドを借り、病院の通路や非常口で列を成して休む。トラブルも多く、病院も管理に頭を痛めている。

重症患者は面会が難しいといえ、家族は少しでも近くで見守りたいものだ。医師との意思疎通もでき、症状の急変時にもすばやく対応できる。

付き添い家族への配慮は患者に寄り添う温かみのある病院としての姿勢を示す。カプセルベッドは周辺の宿泊施設よりも料金が手頃で患者家族の経済的負担の軽減にもつながる。同病院は、いずれ付き添い者宿泊専用棟の試験運用も考えている。

3年前武漢市センター病院がスマホで決済できる付添者専用の折り畳みベッドを院内に設置してから、同様のサー

ビスが広がっている。各地の医療部門もこれらの経験を取り入れ推進してほしい。

『新京報』2022年11月20日

野菜を廃棄するわけは

先日山東省曹県（曹県）の農民がアップした動画「芹菜（中国セロリ）が売れない」が注目を集めている。広い面積に植えたのに買い付けに来る人もおらず、苦肉の策で捨てることにしたという内容だ。例年なら初冬のこの時期は野菜の生産量も少なく、よく売れる時期だ。

ある野菜農家は言う。曹県にはコロナのリスクが高い地域がないにもかかわらず買い付けに来る業者は少ない。外地から来る車は3日前に届け出なければならぬ。鄭州や西北の5つの省から来る貨物トラックは届け出ても入ってこられない。そのため地元トラックで出荷するしかないのだが、感染リスクの高い地

域を通らなくても戻ってきたら運転手は自宅で7日間隔離される。かくして曹県の野菜は滞る。これは決してこの地区特有の話ではない。

北京新発地市場の報告書によれば、10月末から11月初旬の野菜の値動きは、産地出荷価格と市場卸売価格が乖離している。産地出荷価格は一元のものは数十銭から数銭に値下がりしている一方で、北京新発地市場の野菜価格は前週比9%も上がっているのだ。その原因は貨物トラックの運転手が検査ステーション通過待ちの時間が長すぎるからだ。並んでいる間に検査結果が期限切れとなり、また並びなおすという状況などが報告されている。

都市の市民は野菜がほしい。農民は野菜を売りたい。作物は待ってくれない。冬を越すためには協力と対策が必要だ。

『農民日報』2022年11月23日



◆令和4年度第9回理事会の議題（12月15日開催）

・確認事項

11月17日に開催された第8回理事会の議事録案が確認された。

・報告事項

①資金繰りについて（定例報告）

②委員会報告（定例報告）

国際交流委員会からは、9月に申請した「日中植林植樹連帯事業」（太原市の植林）が認可されたことが報告された。

各委員会からの会員に対する周知事項は、「善隣」誌に掲載することを検討することとした。

③事務局報告

1月に開催予定であった「新年互礼会」はコロナ感染の状況を鑑み中止とする。協会の年会費は令和5年度から徴収する。空室状態が続いていた3階については、テナントも決まり1月中旬以降入室予定。

◆令和4年度第10回理事会の議題（1月19日開催）

・確認事項

12月15日に開催された第9回理事会の

議事録（案）が確認された。
・協議事項

監事から「新任役員・新任委員向けのガイダンス」についての提案、説明があり、修正要望などを事務局まで提出することとした。

・報告事項

①資金繰りについて（定例報告）

②委員会報告（定例報告）

③事務局報告

令和5年度の事業計画の作成を各委員会に要請した。（事務局長 竹前栄男）

同好会だより

＜一石会（囲碁）＞

3月から一石会も始まります。会員募集中ですので、ご興味のある方は、事務局までご連絡ください。

＜俳句会＞

対面での俳句会は4名が集まれば開催いたします。ご興味のある方は、事務局までご連絡ください。

＜謡曲会＞

松木千俊先生のお稽古は一人ずつの個人指導です。ご興味のある方は、事務局までご連絡ください。

みんなの写真館

エジプト最大ピラミッド（表紙）

この写真は、エジプトのピラミッドです。ギザにあるクフ王のピラミッドで、3大ピラミッドの中で最も大きいピラミッドです。約138mの高さがあり、270〜280万個ほどの数の石を積み重ねて造られているといわれています。このクフ王のピラミッドは作り方など謎が多く、世界の七不思議の1つといわれています。盗掘口といわれる入り口から中へ入って、大回廊から前室を経て王の間に至りました。ここには、花崗岩製の簡素な棺が置かれています。本来中にあ

るべきクフ王のミイラはなく、代わりに7センチしかないクフ王の像は、エジプト考古学博物館に展示されています。エジプトを訪ね、世界遺産のピラミッドを見るのは子どものころからの夢で、今回の訪問でようやく実現しました。（姜晋如）

インドネシアマラッカ海峡の伝統シラス漁（表4上・下）

1976年4月シンガポールの魚市場に近海で取れた魚介類が、豊富に並んで

いた。特に金揚げ塩蔵したシラスが黄変して異臭を放っているのもあった。近海のマラッカ海峡産である、鮮度が良ければ日本では高く売れると考え、早速関係者に連絡を取り、銚子の水産業者からインドネシアのマラッカ海峡にシラスの資源が豊富との情報を得、シラス・プロジェクトを立ち上げ、友人を介して現地調査に入る。現地で小型の船をチャーターして、メダンからアサハン河を下って、アサハン港から海へ出た。

インドネシアの暦は西暦（太陽暦）とイスラム暦、そしてチャイニーズカレンダー（農曆）は漁業従事者が月齢を計算して、潮の干満を予想して魚を取るのに用いられる。陸地が見えなくなる領海ぎりぎりのところに、チェマル（定置網の櫓の建屋）が設置されて、ヤシの杭を打ち込み、板を並べて作業場と居住の小屋にして、海上で生活をしながら漁をする原始的な漁業。マラッカ海峡は干満の差が5〜10mあり、満潮時には最大10mを超える。海峡は湖のように静かな海面で、漁獲したシラスができると、小屋の上に赤旗を掲げる。陸上で確認したら集荷船が引き取りに来る。（新宅久夫）

2023年3月の行事予定

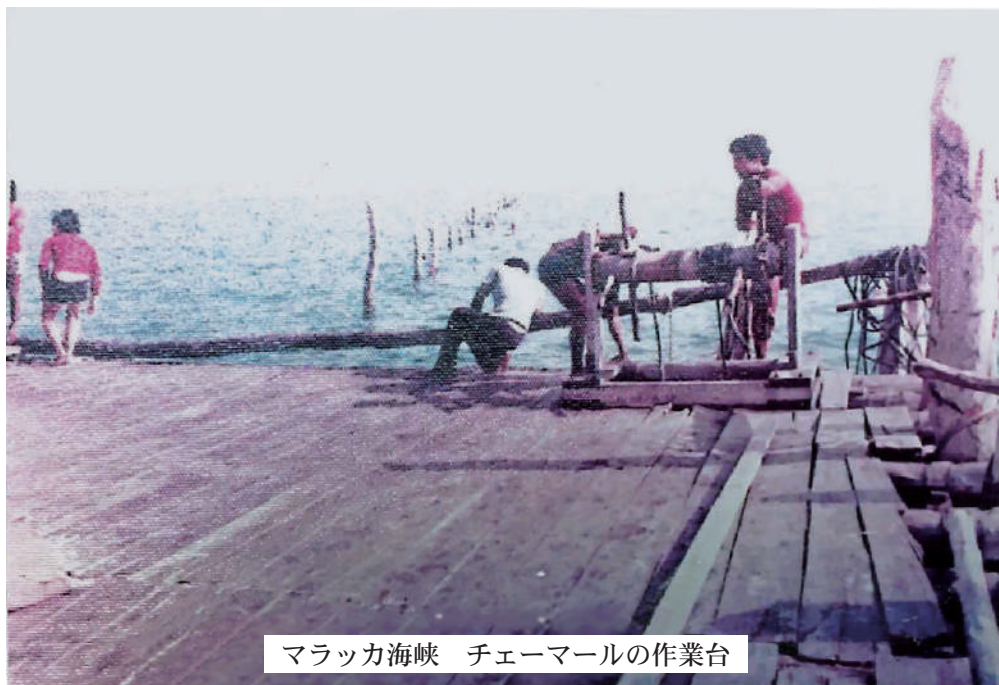
- 6日(月) 14:00 公開 第23回オンライン講演会 (Zoom と対面のハイブリッド方式で実施)
「ポスターに見る観光国家・満州の実像」
田島奈都子氏 (青梅市立美術館学芸員)
- 8日(水) 13:00 俳句会 (対面は4名参加で開催)
兼題「宮沢賢治」及び当季雑詠から5句を投句 (2月末までに)
- 14日(火) 14:00 謡曲会 (松木先生お稽古)
- 17日(金) 14:00 公開【善隣中国塾】 (Zoom と対面のハイブリッド方式で実施)
塾長: 矢吹晋氏 (横浜市立大学名誉教授、当会学術顧問)
- 23日(木) 14:00 公開 第24回オンライン講演会 (Zoom と対面のハイブリッド方式で実施)
「歴史から見たロシア、ウクライナ関係と今後の展望」
黒川祐次氏 (元ウクライナ大使、元日本大学国際関係学部教授)
- 28日(火) 14:00 公開 第25回オンライン講演会 (Zoom と対面のハイブリッド方式で実施)
「困難を乗り越える松下幸之助の考えの根底にあるもの」
佐藤嘉信氏 (パナソニックホールディングス (株) 終身客員、当会会員)
- 30日(木) 13:00 公開 第26回オンライン講演会 (Zoom と対面のハイブリッド方式で実施)
「中国留用そして祖国で——日中友好交流の旅路——」
橋村武司氏 (日本天水会会長、清華大学日中民間交流研究所顧問)

3月の会議予定

7日(火) <u>15:00</u>	国際交流委員会	16日(木) 13:00	理事会 (第12回)
8日(水) <u>15:00</u>	財政委員会	16日(木) 15:30	広報委員会
14日(火) 13:00	環境委員会	22日(水) 13:00	東北委員会
14日(火) 13:30	講演委員会 (対面&Zoom)		

※下線は通常日程に変更あり。

みんなの 写真館



マラッカ海峡 チェーマールの作業台



アサハン港からの通船

INTERNATIONAL GOOD NEIGHBORHOOD ASSOCIATION (IGNA)

<https://www.kokusaizenrin.com>